

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

片倉もところによるサウディ・アラビア，ワーディ・
ファーティマ地域対象とするフィールド調査資料の
学術的特徴について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 縄田, 浩志, 藤本, 悠子, 河田, 尚子, 片倉, 邦雄, 古澤, 文, 渡邊, 三津子, 遠藤, 仁, 石山, 俊 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009858

片倉もとこによるサウディ・アラビア、 ワーディ・ファーティマ地域を対象とする フィールド調査資料の学術的特徴について

縄田浩志¹⁾²⁾・藤本悠子²⁾・河田尚子²⁾・片倉邦雄²⁾・
古澤 文²⁾・渡邊三津子²⁾³⁾・遠藤 仁¹⁾⁴⁾・石山 俊⁵⁾

1) 秋田大学, 2) 片倉もとこ記念沙漠文化財団, 3) 奈良女子大学,
4) 人間文化研究機構, 5) 国立民族学博物館

1 長期フィールド調査研究の意義とは

同じ調査研究者が同一地域で100年以上の時間幅でフィールド調査研究を継続することは無理である。地域コミュニティ、特に伝統的共同体の集落を中心として1年以上の住み込みによる集約的なフィールド調査を実施するという方法論的特徴をもつ人類学分野では、同一地域で数十年以上の時間幅をもって持続的に調査研究を実施していくことの意義を議論し始めて久しい (Foster et al. eds. 1979; Kemper and Royce eds. 2002)。「境界を持った」コミュニティという神話と同じくらい、「典型的な」年は存在しないと言える。自然や人間の出来事は、いつでも「典型的な」年から「普通ではない」年になりうる。それ故に、1年という期間を超えて見ることは、えてして表面的な理解にとどまりやすい仮説を通してではなく、少なくとも人々が暮らしている時間幅をもって生活に寄り添い、考察することを重視する。なぜならば、人間が何年も何十年もかけてやっている実際の生活が興味深いからである (Kemper and Royce 2002a: xvii)。

Kemper and Royce (2002a) は「長期フィールド調査研究 (long-term field research)」の特徴を簡潔に以下のようにまとめている。「長期フィールド調査研究は、変化と持続 (change and persistence) を人間社会の通常特性として示し、両者の複雑さを浮き彫りにしてきた。一定期間の訪問にとどまる民族誌 (single-visit ethnography) では把握ができないやり方を通じて、倫理的な課題を慎重に取り扱い、責任感をもって活動してきた。主に応用人類学や開発学の分野へ多大な貢献をしてきた。また調査国や調査地出身の学者の参加に喜んで応じながら、学際的なアプローチを促進してきた。人類学が向きあうべき新たな研究上の問いをもたらし、新しい方法論を開拓してきた。また研究対象とする社会との時間をかけた関わりあいによって、人類学者自身も変貌することを自覚し、故に、人類学者の役割についてまた対象社会への人類学の影響について、包括的な議論をリードしてきた。要するに、フィールド調査の性質そのものを変化させてきたと言ってよい」 (Kemper and Royce 2002a: xvi)。

「長期フィールド調査研究」は「持続的な民族誌的調査研究 (sustained ethnographic

research)」と言い換えることもできるが (Kemper and Royce eds. 2002: x), 人類学的・民族学的なフィールド調査研究である点を明確にしている用語法としては、後者の方が実態を想像しやすいかもしれない。ただ、同一地域で長期的、持続的に行われてきた調査研究であっても、同じ調査研究者であるかにかかわらず調査研究が一定期間継続していることを意味する「継続研究 (continuing studies)」と、最初の調査研究者から別の調査研究者らによって引き継がれた「再研究 (restudies)」とを呼び分ける用語法があるように (Corti and Thompson 2004), 「長期」もしくは「持続的」といっても、調査研究者の関わり方の観点からいくつかのタイプに整理することができる (Kemper and Royce 2002a, 2002b; Sbriccoli 2016)。(1) 最初の調査研究者 (個人もしくは夫婦) は当初意図していたわけではないが、追跡調査 (follow-up study) を継続する中で、その調査研究者の学生や共同研究者を本人の意思で巻き込んでいって、結果として調査が継続されたケース (A. P. Royceによるメキシコ Juchitán 調査, W. Pendletonによるナミビア Katutura 調査, T. S. Epsteinによるインド Mysore 調査等), (2) 最初の調査研究者 (個人もしくは夫婦) は調査初期の段階から調査を長期的に継続することを意図しており、自身らが追跡調査を継続しつつ、主体的に調査グループを形成して共同研究を推進し、後継者に引き継いでいったケース (E. Z. Vogtによるメキシコ Chiapas 調査, G. M. Foster, R. V. Kemper, P. S. Cahnによるメキシコ Tzintzuntzan 調査, T. Scudder, E. Colson, L. Cliggettによるザンビア Gwembe 調査等), (3) 最初の調査研究者の意図や目論見というよりも、むしろ後の調査研究者が最初の調査研究者と交流を持ちつつ再研究を志向したため、結果的に継続されているケース (U. C. Johansen, R. Whiteによるトルコ Aydınlı 調査, A. C. Mayer, T. Sbriccoliによるインド Jamgod 調査等), (4) 最初の調査研究者とは時代が異なり交流できない故、最初の調査研究者の残した調査資料や研究成果を再分析しながら、次世代の調査研究者による再研究が行われて、結果的に継続されているケース (C. Kluckhohn, L. Lamphereによる米国 Navajo 調査等), がある。

他方、社会学分野を中心として、同一の個人や集団を対象にして一定の時間間隔において繰り返し質的 (定性的) 調査を行う研究は「質的縦断調査研究 (qualitative longitudinal research)」と名づけられ、その方法論的認識は深まってきている (Neale 2019; Seale et al. eds. 2004)。ただし人類学的・民族学的な継続研究の場合は、一定の時間間隔をあらかじめ設定するケースはほとんど確認できない。

他の研究者によって収集された質的データ (qualitative data) を再利用 (re-use), 再研究 (restudy) する場合、いくつかの異なった研究の方向性がある。質的データのアーカイブ化の課題についての多くの優れた論考を発表している Corti and Thompson(2004) は、(1) 記述として (description), (2) 比較調査, 再研究もしくは追跡調査として (comparative research, restudy or follow-up study), (3) 再分析もしくは二次的分析として (re-analysis or secondary analysis), (4) 調査デザインと方法論的な進展として

(research design and methodological development), (5) 検証として (verification), (6) 教育と学習として (teaching and learning), という6つにまとめている。

本稿では、先人が収集した民族誌的なフィールド調査資料 (ethnographic fieldwork materials) に対して、フィールド調査資料を収集した最初の調査研究者による調査研究内容や資料収集・整理法の特徴を踏まえながら、次世代の調査研究者が再分析して二次的利用を行うことを目的として、同一の調査地において次世代の調査研究者が学際的な調査グループを形成して実施する再研究というアプローチの可能性とその意義について議論する。再研究においては、データへの解釈をし直し、データへの新たな問いを生み出しつつ、新しいテーマを研究していくことになる。また、一定の時間が経過したが故に、元データ分析当時は可能ではなかった新しい方法を開拓することも出来る。フィールド調査資料の再分析、二次的利用に立ちはだかる課題は、対象となるフィールド調査資料の特質に大きく左右されてしまう点にある。したがって、いつ、どこで、どのような問題意識のもとに、どうやって収集されたのかといったフィールド調査資料にそなわっている学術的特徴を把握することから始めなければならない。

このような観点から、サウディ・アラビアの一定地域において数十年にわたり継続して収集された片倉もところフィールド調査資料 (The Motoko Katakura Fieldwork Materials) を対象として、その学術的特徴を明らかにしたい。

2 片倉もところフィールド調査資料の整理と再分析に向けた課題抽出

2.1 文化人類学者・人文地理学者、片倉もところ

2.1.1 片倉もところの研究歴と人物像

片倉もところ (1937~2013) は (写真1), 文化人類学者・人文地理学者として、サウディ・アラビアをはじめとする中東地域の遊牧民やイスラーム文化の研究に従事した (表1)。津田塾大学在学中のアメリカ留学の際に中東からの留学生たちと出会い、それをきっかけに、アラブ・イスラーム研究を目指した。1963年から2年間エジプト、カイロ大学文学部アラビア語学科に留学して現地語の習得に努め、1974年に東京大学大学院理学系研究科地理学専門課程博士課程を修了し理学博士を取得した。津田塾大学、国立民族学博物館、中央大学の教授を経て、国際日本文化研究センター所長を歴任した。国立民族学博物館には1981年4月から1993年3月までの12年間在籍した。国立民族学博物館、総合研究大学院大学、国際日本文化研究センターから名誉教授の称号を授与されている (河田・藤本 2019)。

片倉もところは、アラブ地域についての既存研究が都市社会もしくは沙漠の部族社会を別個に扱い、包括的なアプローチに欠けているという問題意識を持ち (片倉 1979: 28-



写真1 仔ヤギを抱いた片倉もとこ
撮影：不明，1970～1974年，ダフ・サイニー村，KM_5571

表1 サウディ・アラビアの社会変化と片倉もとこのフィールド調査 (■印はサウディ・アラビア国内の出来事)

<p>中東とサウディ・アラビアの主要な出来事</p> <p>1932 ■サウディ・アラビア王国建国 ■初代アブドゥルアズィーズ（アブドルアジーズ）国王即位</p> <p>1938 ■アッダンマーム（ダンマン）油田の発見</p> <p>1945 第2次世界大戦終戦</p> <p>1948 第1次中東戦争</p> <p>1953 ■第2代サウード国王即位，女子教育導入，女学校設立</p> <p>1956 第2次中東戦争</p> <p>1957 ■キング・サウード大学設立</p> <p>1960 OPEC(石油輸出国機構) 設立</p> <p>1964 ■第3代ファイサル国王即位</p> <p>1965 ■テレビ放送開始</p> <p>1967 第3次中東戦争</p>	<p>片倉もとこの略歴とサウディ・アラビア調査暦</p> <p>1937年10月17日 奈良県にて誕生，上海で，幼少時から第2次大戦末期まで過ごす</p> <p>1956 津田塾大学学芸学部英文科入学</p> <p>1959 米国，チャタム女子大学に留学，中東，アルジェリア等からの留学生に出会い，イスラームに興味をもつ</p> <p>1962 津田塾大学卒業</p> <p>1963 エジプト，カイロ大学文学部アラビア語学科に留学（～1965） アラビスト外交官の片倉邦雄と結婚</p> <p>1960年代中頃 サウディ・アラビア，パスコ株式会社三角点測量隊に同行</p> <p>1968 中央大学大学院修士課程修了（社会学） 片倉邦雄の駐サ大使館赴任（1968年9月～1971年4月，駐サウディ・アラビア大使館1等書記官）に同行して，サウディ・アラビアへ</p> <p>1968～1970 最初のワーディ・ファーティマ地域における集約的な現地調査</p>
---	---

1969	イスラーム諸国会議機構発足 (2011「イスラーム協力機構」に改称)	1971	米国コロンビア大学中東研究所客員研究員
1973	第4次中東戦争 第1次オイルショック	1971~1975	毎年ワーディ・ファーティマ地域を訪れて調査を継続
1975	■第4代ハーリド国王即位	1974	東京大学大学院博士課程(地理学)修了・理学博士 ワーディ・ファーティマ地域での調査研究成果を博士論文にまとめる
1979	イラン・イスラーム革命 第2次オイルショック	1977	英文著書“ <i>Bedouin Village</i> ”出版
1980	イラン・イラク戦争 ■政府がアラムコ(アラビアン・アメリカン・オイル・カンパニー)を完全国有化	1978	津田塾大学学芸学部教授
1982	第5次中東戦争 ■第5代ファハド国王即位	1981	国立民族学博物館教授
1986	■国王の称号が「二聖モスクの守護者」となる	1982~1983	ワーディ・ファーティマ地域再訪、物質文化資料収集
1989	マルタ会談により冷戦終結	1985~1986	カナダ、プリティッシュ・コロンビア大学客員教授
1990	湾岸戦争開戦(1991停戦)	1987~1988	ワーディ・ファーティマ地域再訪、物質文化資料収集
1992	■統治基本法、諮問評議会及び地方制度法の制定	1987~1989	アラブ首長国連邦アブー・ザビー、アラブ文献研究センター客員研究員
2000	■観光委員会(のちの遺産観光庁)発足	1993	国立民族学博物館退職、以後名誉教授に。中央大学総合政策学部教授
2001	アメリカ同時多発テロ事件	1996	アラビア語著書“ <i>Ahal al-Wādī</i> ”出版
2003	イラク戦争	2003	ワーディ・ファーティマ地域再訪
2005	■第6代アブドゥッラー(アブドゥラー)国王即位、地方議会選挙開始国王奨学金プログラム開始(2007年~日本への留学開始)	2005~2008	国際日本文化研究センター所長
2010	チュニジアでジャスミン革命(アラブの春~2013)	2008	サウディ・アラビア首都アッリヤード(リヤド)で開催の第6回日本・アラブ対話フォーラム参加
2011	■国立総合女子大学プリンセス・ヌーラ・ビント・アブドゥッラフマーン大学設立	2013年2月23日	永遠のフィールドワークへ旅だつ
2012	■ロンドン五輪、初めてサウディ・アラビア女性選手が参加	2015年3月	片倉もところ記念沙漠文化財団メンバーがワーディ・ファーティマ地域を訪問
2013	■諮問評議会に女性議員30名任命	2018年4月~5月	ワーディ・ファーティマ地域再調査(第1回)
2015	■第7代サルマーン(サルマン)国王即位	2018年12月~2019年1月	ワーディ・ファーティマ地域再調査(第2回)
2016	■「ビジョン2030」発表	2019年6月	企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年」を大阪、国立民族学博物館にて開催(~2019年9月)
2018	■映画館が35年ぶりに復活	2019年9月	ワーディ・ファーティマ地域再調査(第3回)
2018	■女性の運転免許解禁	2019年10月	企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年」を横浜ユーラシア文化館にて開催(~2019年12月)
2019	■アッリヤード(リヤド)国際マラソンに女性も初めて参加可能に		



図1 サウディ・アラビアとワーディ・ファーティマ地域 (出典：渡邊・縄田 2019)



写真2 緑しげるワーディ・ファーティマにたたずむ片倉もとこ
 撮影：不明，1975年2～3月，ワーディ・ファーティマ，KM_3910

29), 両者が関わり合う地域としてサウディ・アラビア, マッカ州のワーディ・ファーティマ地域を調査地として選定した(図1)。男性と女性の生活空間が厳重に分かれている社会において, 女性が単身で調査研究を行うのは大変困難であるとされたが, 片倉もところは1968年12月~1970年8月にかけての20ヶ月間にわたり, 集約的なフィールド調査をなしとげ, その後も1971~1975年にかけて毎年のように同地を訪れ, 1982~1983年, 1988年, そして2003年にも再訪している(写真2)。片倉もところの集約的なフィールド調査時期は, サウディ・アラビア社会に変化の波が到達した時期と重なり, 片倉もところのフィールド調査資料は当時の人々の生活状況を記録した貴重な文化遺産となっている(河田・藤本 2019; 片倉/メレー 2019)。

2.1.2 主な著作と考察

片倉もところの主な著作と考察は, 以下のようにまとめられる。

サウディ・アラビア, ワーディ・ファーティマ地域を対象とした調査は, 英文単著『*Bedouin Village, A Study of Saudi Arabian People in Transition*』(Katakura 1977, アラビア語版は1996年)として出版されており, 片倉もところの研究業績の主軸となるものである。アラビア半島の遊牧社会での長期フィールド調査の成果に基づいて執筆した学位論文をもとにしており, 定住化がすすむ遊牧民社会を記録した文化人類学的・人文地理学的研究として, 国際的に高い評価を受けた (James 1978)。サウディ・アラビア西部ワーディ・ファーティマ地域の歴史的背景, 経済システムの変容, 親族関係等の社会的側面を, 特に女性人類学者の視点で初めて明らかにした民族誌情報によって, 現在では当該分野の古典となっている(牧野 1979: 157-160; 宮治 1977: 84; Altorki and Cole 1989: 3; Eid, Fallatah, and Yamada 2020: 2)。アラビア語版は, 現地の大学で教科書としても長年利用されてきた。

片倉もところ自身の言葉を借りれば(片倉 1979: 5), 同書を定量的データによる「骨」とすれば, 定性的データによる「肉づけ」として日本語で一般向けに書き下ろしたのが『アラビア・ノート』(片倉 1979)であった。日本においてほとんど知られていなかったアラビアの人々の普段着の生きいきとした生活や独自の文化を, やわらかな日本語でわかりやすく紹介した画期的な作品として, 複数の学術賞を受賞した(河田他 2019)。

また, 中東各地でのフィールドワークで得た知見をもとに, 世界に広がったムスリムの日常生活, 価値観, 人間観をわかりやすくまとめ, 「イスラーム的近代化」について展望した『イスラームの日常世界』(片倉 1991)は, 日本におけるイスラーム理解の醸成に多大な貢献をし, 今もなお広く読み継がれている。朝鮮語にも翻訳, 出版された。同年, アラブ・イスラーム研究に新境地を開拓したことが評価され, 大同生命地域研究奨励賞(1991)が授与された。

アラビアの沙漠から海に出て行った「海のベドウィン」の存在を明らかにした論考(片

倉 1988) は、「学問的スクープ」と評された (安東 1989)。イスラーム世界における「動」の文化について考察を深めた『移動文化』考』(片倉 1998) においては、イスラーム世界のみならず日本における「動」の文化についても考察を広げた。

半世紀ちかくにわたる研究生活の中で、片倉もところは人々の生活と文化に密着した、しなやかな実証研究を独自のスタイルで築きあげてきた。人間への優しいまなざしと、文化、文明への洞察の深さに満ちたその仕事は、アラブ、イスラーム世界に限らず、概して非欧米社会への偏見と誤解に縛られやすい日本において、異文化理解と比較文明への社会的な関心を引き寄せた (後藤 1992)。

なかでも片倉もところの造語である「ゆとろぎ」は、日本社会に新たな生き方を提起した (片倉 2008; 2009)。アラビア語で「休息」を意味する「ラーハ」を片倉もところが日本語に訳した造語が「ゆとろぎ」で、「ゆとり」と「くつろぎ」を足して「りくつ (理屈)」をひいたものである。片倉もところは、数十年にわたる世界各地でのフィールドワークから、アラビアの遊牧民が人生で最も大事にしているのが「ラーハ」であると気がついたという (片倉 2009: 101-106)。とかく「りくつ」に縛られがちな日本で「ゆとり」や「くつろぎ」というと、受動的なニュアンスが感じられるが、アラビアでの「ラーハ」は、暮らしのなかで能動的に掴み取るといった積極的な意味合いで用いられる (片倉 2008: 8)。

病に倒れながらも、自分自身をあらゆる角度から見つめ直してフィールドワークし続けた『旅だちの記』(2013) が遺作となった。自身の死をも考察対象としつつ、人々に語り伝えた内容は、孤高の人類学者が到達しえた、唯一無二の輝きを放っている。

日本語の著作において「荒野に生きる女たち」、「遊牧の女性」、「アラビアの砂漠に生きる人たち」、「沙漠に生きるベドウィン」等の表題の下に紹介されている民族誌的なエピソードのほとんどは、ワーディ・ファーティマ地域で実施したフィールドワークに基づいている。ワーディ・ファーティマ地域における民族誌もしくは地誌としての記述と考察は、英語・アラビア語の著作としてまとまった形で公表された一方、日本語においては同様の形態ではまとめられることはなかった。日本語では、例えば集落の成立 (片倉 1974)、住居のタイプ (片倉 1982)、族的結合 (片倉 1985) といった個別のテーマごとに公表されたのである。結果として、定性的データの「肉づけ」の内容は日本において広く知られ評価が定まっているが (清水 2004)、定量的データの「骨」の部分は学術的には未評価の部分が残されていると判断できる。他方、少なくとも国際的にみて、また調査対象地の関係者からは、英語とアラビア語で執筆された著作における記述と考察こそが、片倉もところの主な研究成果であると認識、評価されていることは紛れのない事実である。

2.2 サウディ・アラビア，ワーディ・ファーティマ地域

2.2.1 オアシス社会の歴史

アラビア半島は世界最大の半島で、その面積はおよそ324万 km²におよぶ。半島のおよそ3分の2をサウディ・アラビアが占め、その南方から東方に、イエメン、オマーン、アラブ首長国連邦、カタール、クウェート、バーレーンが接する。アラビア半島西部には紅海、南部にはアラビア海、東部にはペルシャ湾（アラビア湾）がある。その地勢は、西が高く東が低い傾向を示し、紅海沿岸地域にはヒジャーズ山地、アシール山地等が連なり、山地の東側には台地が広がっている（Stacey International and al-Trurath 2006）。

アラビア半島を流れる河川は、総じて雨が降った時だけ水が流れる季節河川であるが、ひとたび上流や山地のどこかで雨が降ると一気に水が流れ下ってくるため、沙漠では洪水により人や家畜が溺死するケースも多い。このように雨が降った時に水が流れる渓谷や谷筋のことを、アラビア語でワーディ（涸れ谷、涸れ川）と呼ぶ。流れる水は伏流して地下水を涵養するため、ワーディは、降水量の少ない乾燥地にあつて比較的水に恵まれた場所であり、アラビア半島では、このような場所に緑のオアシスが形成される（渡邊・縄田 2019）。

アラビア半島西部に位置する調査地ワーディ・ファーティマは、水と緑に恵まれたオアシス社会が長期にわたり形成された地域として知られる（図2）。イスラームの聖地マッカやマディーナと紅海に臨む港町ジッダを結ぶ交通路の途上に位置する。約3,000年前

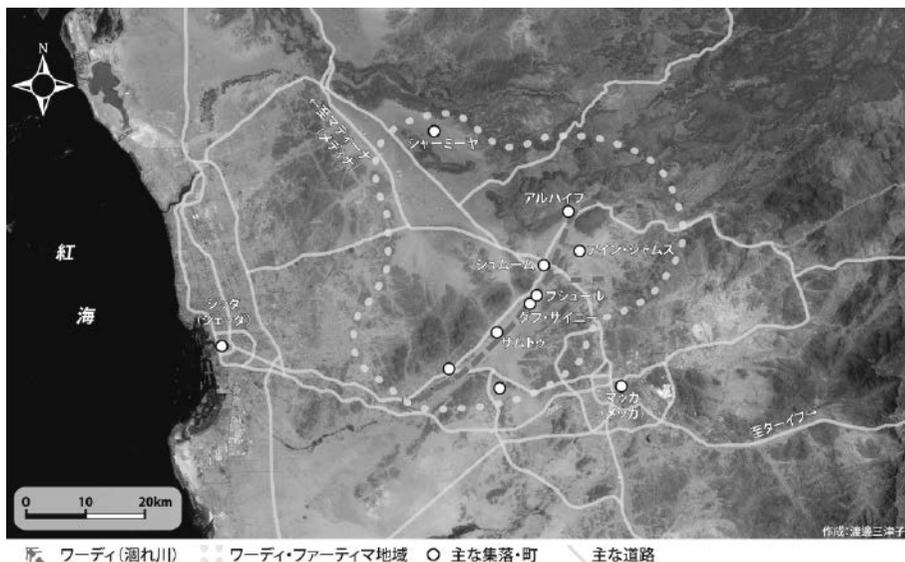


図2 ワーディ・ファーティマ地域と片倉もところの主な調査地（出典：縄田・渡邊他 2019）

から同地を訪れる商人たちでにぎわう一大市場スーク・ムジャンナが築かれ、交易の通り道として栄え、イスラーム時代以降は、マッカへの巡礼の道として、多くの人々に利用されてきた（東京国立博物館他編 2018）。11世紀の地理学者バクリーによればイスラームの成立前、この地域は水が多少苦い（マッラ）というイメージがあり、「マッラ・ダハラーン（水が多少苦いワーディ）」の呼び名で知られていたという（Al-Bakrī 1983）。最近では、旧石器時代や交易路沿いの遺跡の発掘も進んでおり、数千年以上の時間幅での人間活動の痕跡が認められる地域である（縄田・渡邊他 2019）。

1932年のサウディ・アラビア建国、そして1950年代から1970年代初めにかけて、化石燃料資源の採掘に経済を大きく依存し始めることにより生活全般が急激に変容していった。その渦中にある伝統的共同体、村社会に住み込んで実施された民族誌的なフィールド調査研究の例は限定される（コウル 1982; Dickson 1949）。アラビア半島全体をみわたしても、特に、男女の生活空間の分離が明確なムスリム社会において、女性人類学者として女性たちと生活を共にしつつ収集したアラブ遊牧民やオアシス社会に関する一次調査資料の稀少性は際立っており、1980年代に実施されたサウディ・アラビア北部オアシス社会に関する研究（Altorki and Cole 1989）、また1990年代になってオマーンで調査した女性人類学者による遊牧社会の変化と開発計画に関する研究（Chatty 1996）を除いて、他に類例がない。

地名の由来については、その昔、フザーア族のファーティマという勇ましい女性騎士がいて、ワーディのある沙漠の一角を占領した。それ以来、ワーディ・ファーティマと呼ばれてきたという（片倉 1987: 14-15）。

2.2.2 遊牧民集落の存在

片倉もこの最初の調査時1968～1970年頃にはワーディ・ファーティマ地域には31の集落があり、人口は20,000人弱であった（Katakura 1977: 58）。当時、定着集落に成りつつあったブシュール村周辺において、部族（アシーラもしくはガビエラ）の領地意識が残っていた。クライシュの子孫であるというアシュラーフ族、アンサールの子孫であるというシュユーフ族、他にもハルブ族またフザーア族の集まりがあり、自分たちの領域とか牧草地に対する占有権を持っていた。ただし、一つの大きな領地を持っているというのではなくて、むしろ飛び地が非常に多かった。また同時に、例えば方言だとか衣服、挨拶の仕方、昔からの詩のスタイル、織物のスタイル等には、文化的な共通性が見られたという（片倉 1974）。

さらに部族自体の中に、支族（アーイラもしくはアシーラ）単位の集団としてブシュリー、ムアッパディ、ラヒーリ等が、ハルブ族の場合にはあり、お互いに社会的な関係を持ちつつも、住みわけもしていた（図3）。部族間・支族間には、社会的関係が強い場合と弱い場合があり、また社会的関係とは全く分離した形でもって、経済的関係を取り

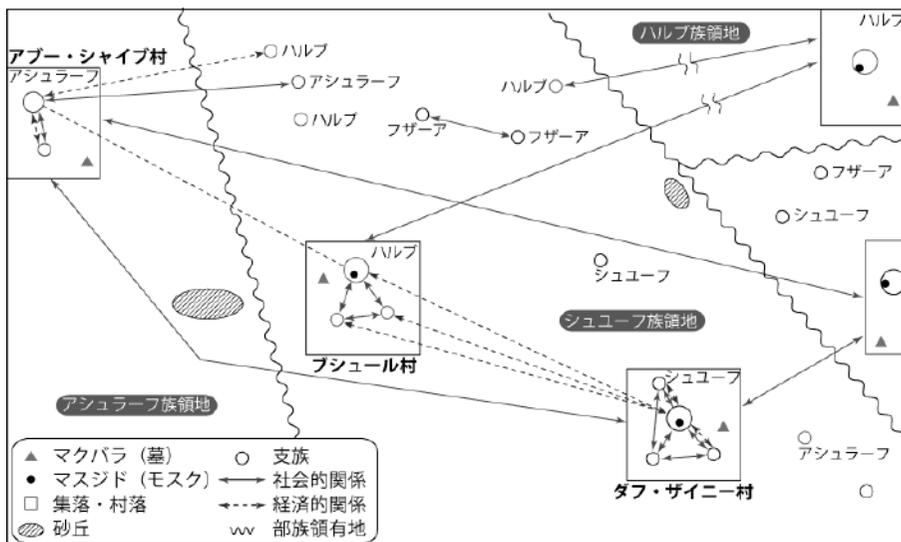


図3 ワーディ・ファーティマ地域フシュール村周辺において1968～1970年頃に観察された部族の領地意識と支族間の社会的・経済的関係性についての概略 (出典：Katakura 1977; 片倉 1974; 縄田編 2019)

持つ場合とそうでない場合があったのである (片倉 1974)。また、そのような定住化した人たちの間には、方言や衣服という場合には、支族さらには部族単位にとどまらない、地域性と呼べる重なり合いも観察されたという。近くに住むものたちは割合よく似た服装をし、お互いに影響し合い、流行の服装を取り入れることもあったのである (片倉 1985)。

片倉もところは当時のサウディ・アラビアにおける遊牧民を、生活、換金物、家畜、地域 (地形や自然要因のこと) のそれぞれの特色に基づいて、「完全遊牧民」／「半遊牧民」／「定着遊牧民」／「都市定着民」にわけて、それぞれの間の可変性について考察した (図4)。ワーディ・ファーティマ地域において集約的な調査対象とした人々は、井戸に依存する農業を行い、定着集落をつくり、副業としてはナツメヤシ製のうちわや敷物等を製作する「定着遊牧民」であり、「遊牧民集落」(すなわち Bedouin village) を形成していると概念化したのである。「遊牧民集落という時、完全または半遊牧民であったものが定着した集落という意味ではなく、将来において、定着から移動生活への可逆性をもっていることも同時に意味」(片倉 1974: 134) している (縄田 2019)。

	生活手段	換金物	家畜 (1世帯平均)	地域
完全遊牧民 ↑	・牧畜（水、草を追って遊牧移動）	・サムナ（ガナムの乳脂） ・マディーレ（ガナム、ラクダの乳のかす*を干したもの） ・スーフ（ガナムの毛） ・ワフル（ラクダの毛） ・ラクダ ・ガナム（ヤギ、ヒツジ）	・ラクダ20頭以上 ・ガナム（ヤギ、ヒツジ）100頭以上	・砂沙漠 ・岩石沙漠（アンナフード地方に多い）
半遊牧民 ↑	・降雨に依存する農業（アサリ） ・出かせぎ ・猟（鳥等自給用） ・養蜂（山岳地のみ） ・牧畜	・農作物（スイカ、飼料） ・労働力 ・養蜂 ・牛ふん（肥料用） ・ウシ（食肉用）	・ラクダ3頭以下 ・ガナム50頭以下 ・ウシ1-2頭	・ワーディ ・山岳地帯 ・都市近郊（ヒジャーズ地方、東部地方に多い）
定着牧民 ↑	・オアシス、井戸に依存する農業（定住集落をつくる） ・副業（ナツメヤシのうちわ、敷物等の製作）	・農作物 ・ウシ（食肉用） ・ロバ ・ハト、ニワトリ、卵 ・労働力（農業労働者として） ・ナツメヤシのうちわ、ナツメヤシの敷物	・ガナム2-10頭 ・ロバ1-2頭 ・ウシ1-2頭 ・ウサギ、ハト、ニワトリ	・オアシス ・ワーディ（半島南部、東部に多い）
都市定住民	・給料所得 ・商業	・労働力 ・商品 ・土地	・ハト、ニワトリ、ウサギ	・海岸地帯 ・盆地 ・オアシス近郊

1968-70年頃サウディ・アラビアにおける遊牧民の生活様式の変化の図式

出典：片倉 1974、表1をもとに加筆修正 *「ラクダの乳のかす」とは、おそらく酸乳の沈殿を乾固させたもの

⇕可逆性を示す

図4 1968～1970年頃のサウディ・アラビアにおける遊牧民の生活様式の変化の図式（出典：縄田編 2019）

2.2.3 地名／民族集団名／人名に対する実名／仮名／匿名表記の選択

片倉もとこがワーディ・ファーティマでのフィールド調査の成果をまとめた主要3点の著作を対象に、まず地名の取扱いという観点から特徴を整理してみる。3点はすべて1968～1970年の調査に基づくが、人文地理学の問題意識とアプローチによる博士論文をもとに出版した英語版（Katakura 1977）、日本の読者向けに文化人類学的なモノグラフとして伝えた日本語版（片倉 1979）、そしてサウディ・アラビア、とくに現地ワーディ・ファーティマの人々に向けて出版したアラビア語版（Katakura 1996）において、書名の選び方、地名の記述の仕方が異なっている。

英語版タイトルは『遊牧民集落』、アラビア語版タイトルは『ワーディの人々』、日本語版タイトルは『アラビア・ノート』である。

たとえば調査地であった「ワーディ・ファーティマ」について、片倉もとこは英語版およびアラビア語版では“Wādi Fātima”と“Wādī Fātīma”を使用した。一方、日本語版では「ワーディ・ハディージャ」と別名を付している。ファーティマという人名の部分を、日本語版では当地で一般的な女性名の一つハディージャに置き換えることにより、実名を匿名化しているのである（片倉 1979: 13）。また、英語版およびアラビア語版において、ワーディ・ファーティマ地域の一角を占め片倉もとこの主な調査対象の集落の1つであった「ダフ・ザイニー（Daf Zayny）」という村名についても、『アラビア・ノート』では「ダフ・ズバイダ」と仮名をあてているが（片倉 1979: 13）、ザイニーは、民

族集団の名称であることから、他の民族集団名ズバイダを代用したと考えられる。日本語における他の論文においても、「ダフ・ザイナー」は「ダフ・ズバイダ」に、また「ブシュール (Bushūr)」という集落名については「ウサイダ」という仮名に替えられている (片倉 1974)。

片倉もところは英語版およびアラビア語版の序文において「調査した集落とそのメンバーの名称は架空である」としている。また日本語版の序文においては「地名、人名は、その名前自体に意味のあることでもあり、実名で記しておきたい誘惑にかられたが、愛する人たちに迷惑がかかってはならないと、すべて仮名にした」と述べている。つまり、英語版およびアラビア語版においては、集落名とそのメンバーの人名が、日本語版においては全ての地名と人名は実名ではないこと、つまり匿名化していることを明確にしているのである。ただし、日本語の他の論文においては、実際は実名ではない「ワーディ・ハディージャ」、 「ダフ・ズバイダ」、 「ウサイダ」といった仮名を用いている場合に、それらが実名ではないと著作や論文の中で明記しているわけではないため (片倉 1974; 1979)、実名が匿名化された記述であると読者は必ずしも認識することはできない形になっている。また地域名「ワーディ・ファーティマ」が実名で表記されている場合もあるので、少なくとも集落レベルの地名や人名に関しては仮名としていると判断できる。

よって基本的に片倉もところは、著作において地域名を記述する際、人文地理学的な報告においては基本的に実名を使用し、文化人類学的にまとめる場合は、たとえ日本語で記述する際でも社会関係に重点をおいた記述が多いため、集落名に加えて地域名も仮名とすることで調査対象社会に配慮していたと推測される (縄田・藤本他 印刷中)。

次に、部族もしくは支族単位の民族集団名について検討してみると、英語版およびアラビア語版では、基本的に実名を用いていると考えられる。日本語版においても、上記のように調査地域や集落名、また人名を仮名にした上で、民族集団名は実名を示していると思われる。

一方、人名については、基本的に匿名化しているものの、使用言語、著作、人物によっては、実名と仮名と匿名を併用していると判断される。親交の深かった、ある女性 (ここではAとする) のケースをみると以下ようになる。

英語版では、ワーディ・ファーティマの祭事に関する記述の中で、毎年断食月明けに既婚女性たちが数名で仲間のもとを訪れ、楽器をいきなり鳴らし詩の合戦をするという「乙女のまつり」を取りあげ、中心人物を「アーティガ (‘Ātīga)」, 訪問される側を「ファーティマ (Fātima)」としている (Katakura 1977: 99)。一方、日本語版では、訪問される側は同じファーティマだが、訪問側の中心はAの実名をあげており (実名であることは、2018年に実施したワーディ・ファーティマ地域再調査において確認した。), 片倉も一緒に加わっていたエピソードが加えられている (片倉 1979: 156-158)。

一方、縁談のエピソードを記述する際に、英語版は、主役の女性を「ある少女」とし

て匿名で登場させ、結婚に最適な相手である父方のいとこからの結婚の申込を断わり、幼いころから相思の仲であった母方のいとこの結婚を成就させた例として挙げている (Katakura 1977: 83-84)。同じ例が日本語版においても言及されているが、少女は「浅黒い顔に利発そうな瞳をやどしたA」と表現され、縁談が実っていく様子が生きいきと描きだされている (片倉 1979: 85-86)。

両エピソードとも特徴的なライフイベントであり、モノグラフにおいて肉づけされた記述は、片倉もとこがコミュニティーに入りこみ、地域の中でもとくにこの女性 (A) と醸成していった信頼関係があってこそ観察し、記録、分析することができた内容といえる。そのため、著書に写真を掲載する場合と同様に、この女性自身から許可を得た上で、日本語版では実名で表記したのではないかと想像できる余地が残されている。ただしアラビア語においては、自身の名前に続き、父や祖父や父祖の名と続くことにより、いわゆるフルネームとなるため、自身の名前がたとえ本人の実名であったとしても、個人が同定できるものではない。したがって、たとえAという自身の名前が実名であったとしても、個人同定ができるものではないため、実質、仮名にとどまっているとも判断される。

また場合によっては一個人、もしくは何人かのエピソードをさしきわりのない程度に一つの仮名を用いて再構成することもあったと考えられる。例えば、日本語版ではスウスウという名の子供が何度か登場するが、これは特定の子供の名前ではなく、子供によくつけられるあだ名のようなものであるため、一人の仮名の下に実際は複数の子供のエピソードを記述したと推測できる。

本稿では上記のように、「ある女性」を「A」と表記する方法をとったが、片倉もとこは実名を仮名に置き換えることはあっても、「A集落」や「B部族」や「C氏」といったようにアルファベット記号を用いて、文章の中では地名、民族集団名、人名のいずれも匿名化することは皆無であった。ただし図表を用いて集落の世帯別、世帯主別に集落の形成過程等进行分析する際には、それぞれを番号で示したり、地名や民族集団名の略号としてアルファベット記号をあてる方法は、英語版、アラビア語また日本語論文 (片倉 1974) のいずれにおいても採用している。

このように、片倉もとこの人物名の取扱いについては、地名と異なり、人文地理学的報告においても文化人類学的報告においても仮名とすることが基本であったが、ある少女と匿名化して記述することもあり、場合によっては実名を用いた可能性さえも残されている。とはいっても、文化人類学的アプローチによる記述においては、自身が見聞きした光景や経験をもとに、対象となる人物との信頼関係をそこなわないことを第一優先として最大限の注意を払っていたと考えられる (藤本他 印刷中)。

2.3 片倉もところフィールド調査資料の再分析にいたる経緯

2.3.1 片倉もところの遺志による片倉もところ記念沙漠文化財団の設立

アラビア半島から世界に広がるアラブ・ムスリム社会を追いかけてきた片倉もところだが、晩年には、「沙漠が自分の原点である」として、不毛の地、緑化や開発をするべき土地としてではなく、沙漠そのものの美しさをひきだしたい、沙漠に住む人々の文化を大切にしたいと強く願うようになった（片倉 2008: 159-164; 2013: 183）。とくに若手研究者に「沙漠そのもののうつくしさをひきだす」研究をと願い、その支援として財団の設立に遺産を使ってほしいと遺言を作成した。その遺言に則り、2013年11月に「片倉もところ記念沙漠文化財団」が設立された。(1) 沙漠文化に関する調査および学際的研究の支援、(2) 沙漠文化に関する芸術活動支援、(3) 沙漠文化に関する講演会、展示会、研究発表会、セミナーシンポジウム、学校への出張授業等の開催、(4) 沙漠文化に関する国内外出版物の刊行支援、(5) 片倉もところ研究資料の整理・公表寄贈に関する事業、等の活動を行い、現在にいたっている（片倉もところ記念沙漠文化財団事務局 2013）。

強調しておきたいのは、同財団の設立によって、片倉もところ調査資料に基づくワーディ・ファーティマ地域再調査への道が拓かれたことである。ただし同時に明確にしなければならないことは、片倉もところの遺言の中に、自身の調査研究資料を若手研究者に引き継いでもらい、ワーディ・ファーティマ地域を対象にした調査研究をこれからも続けてほしいという遺志は必ずしも読み取れなかった点である。むしろ、広く「沙漠そのもののうつくしさをひきだす」研究の発展を願っていたと思える。もちろん財団は遺志に基づいて、「若手研究助成」と「一般活動助成」を創設し、次世代による沙漠文化研究の活性化に力を注いでいる。

それでも片倉もところ記念沙漠文化財団の活動が、ワーディ・ファーティマ地域の再調査へとつながっていったのには、複数の背景がある。その大きなきっかけは、当時の調査研究の最大の協力者であったサウディ・アラビアの方との交流の再開にあり、さらにその方の尽力によって、新しい調査グループがワーディ・ファーティマ地域を再訪する機会が創出されたことにある。

2.3.2 フィールド調査関係者との交流再開

一周忌にあたる2014年2月に、片倉もところ記念沙漠文化財団の設立披露パーティーが東京で開催された。それにあわせてサウディ・アラビアより、片倉もところフィールド調査における最大の協力者アブドゥッラヒーム・アル＝アフマディ氏と、その娘であり現在は議員（2013年、国王勅令により選ばれた30名、全体の20%に当たる諮問評議会初の女性議員）の1人として活躍しているハナーン・アル＝アフマディ博士、そして彼女の夫で共に公衆衛生の学位保持者であるタラール・アル＝アフマディ博士を招聘した（写真3）。



写真3 片倉もとこ記念沙漠文化財団設立披露パーティーにおいて片倉邦雄（右）とアブドゥッラヒーム・アル＝アフマディ（左）両氏がこれまでの交流について語る
撮影：藤本悠子，2014年2月21日，東京

アブドゥッラヒーム氏は、帰国して直ちに印象記を地元メディアに投稿した。終始一貫して応援してきた片倉もとこフィールド調査を回想するとともに、日本の研究者たちが、1万kmも離れた、しかも沙漠文化には程遠い湿潤な文化環境の中で、地元のわれわれが圧倒的な石油文明の中でほぼ忘れかけているアラブの伝統と文化をこんなに熱心に追究しようとするのは誠に新鮮な驚きだったと述懐している（アル・アフマディ 2014）。ハナーン博士は、片倉もとこがサウディ・アラビアでフィールド調査をしていたころ自分はまだ子供だったが、「アンティエ・モトコ」（もとおばちゃん）と呼んで慕っていたこと、また米国留学中に大学の図書館で『*Bedouin Village*』を発見し夢中で読んだこと等、思い出話を温かく語った（郡司 2014）。

アブドゥッラヒーム氏は、片倉もとこが調査した当時のワーディ・ファーティマ社会開発センター所長として、彼女のフィールド調査を様々な角度から支援した。片倉もとこ・片倉邦雄夫妻との交流は終わることなく、1977年には渡日したこともあったが、手紙・電子メールを通じた交流は絶やさず続いていた。退職後は、アラビア語詩やエッセイの執筆に没頭して何冊かの著書をアラビア語で著わすと同時に、若手文学者のサポートに力を注いでいた。このようにアラビア語にも造詣が深かったアブドゥッラヒーム氏は、片倉もとこが「ゆとろぎ」という造語を生み出した際のアラビア語の原語「ラーハ」という言葉について、2016年11月に開催された「ゆとろぎ賞第2回授賞式対談」におい

て、以下のように語っている。

アラビア語の“ラーハ”という言葉について言うと、日本語への翻訳ということもあるでしょうが、人が何事かを成し遂げた時に感じるもの、というのを“ラーハ”であると私は捉えています。すごく疲れていて、それから解放されて楽になったとか、そういった意味での“ラーハ”というよりも、何かを成し遂げた時に覚えるものではないかと思います。

もところさんはワーディ・ファーティマで、日本と違う環境、自然や宗教も違う村、しかも女性として、その村の社会に入っていくなか、日本と違う環境で、非常に困難に直面したと思いますが、努力して乗り越えました。そしてついにサウディ・アラビアの女性たちとも友人になりました。男性たちにも歓迎され、学びたいことを学び取っていくことができた訳です。

“ラーハ”は、その疲れから解放されたというよりも、何事かを成し遂げたことで心が安らぎ、誰も傷つけることなく、みんなのために何事かをなし得たという、そういう時に感じるものだと考えます。私がサウディ・アラビアの学者たちに、ラーハ賞（ゆとろぎ賞）が設けられたということ話をすると、彼らはびっくりしました。それはすごく斬新だからです。新しい賞でこれは非常に評価に値するたぐいまれな賞だというふうに思います（藤本 2019: 48）。

以上のように、「ラーハ」はアブドゥッラヒーム氏によれば「達成感」として解釈され、前述の片倉もところが創りだした「ゆとろぎ」の指す意味と解釈の違いはみられる。しかし、人生のなかで大事なものとしてその能動性を積極的に評価する点で両者は通じている。片倉もところによるフィールド調査とそれに基づく研究活動は、サウディ・アラビア関係者によってその真髄が多面的にまた的確に理解されていることをうかがい知ることができる。

その後、アブドゥッラヒーム氏はおよそ一年をかけて、片倉邦雄を中心とする財団メンバーがワーディ・ファーティマ地域を再訪できるように、受入機関とのアレンジ、ビザ取得に熱意をもって努力し、訪問を現実のものとしたのである（縄田・片倉他 2021）。

2.3.3 既発表文献資料の整理・検証・デジタル化の開始

片倉もところの主な調査地であった、ワーディ・ファーティマ地域への再訪の前に、財団関係者からなる調査グループが行った準備作業は、既発表文献資料の整理、検証、デジタル化の作業と、また、遺された民族誌的フィールド調査資料の全体像の把握とその整理であった（写真4）。

二次利用者（調査グループ）は第一に、元の調査者でありフィールド調査資料収集者（片倉もところ）の興味・問題意識に寄り添わなければならない。そこで、発表された著書・論文・その他エッセイ等を可能な限りすべてPDF化してOCR（光学文字認識）をかけてテキスト認識可能な状態にした。2014年1月から2019年1月にかけておよそ5年をかけてPDF化した文献は、編著書、論文、エッセイ等、片倉もところが執筆したものが193点、講演・対談・インタビュー等が98点にのぼった。その中から、著書を中心として重



写真4 片倉もとが残した民族誌的フィールド調査資料
撮影：藤本悠子，2020年8月3日，東京

要度が高いと判断された13文献についてはテキストを Word 文章に変換し、653,896字分のテキスト・データとした。このような研究内容のテキスト化・デジタル化作業により、キーワード検索を可能とした。同時に、デジタル化したテキスト群と文献に掲載されていた写真群を対応させることにより、写真一枚一枚にメタ・データとしてのテキスト情報を付与していく作業も開始した。

このような整理作業を通して、片倉もとの論考に向き合った結果、フィールド調査資料収集における姿勢を調査者自身が表現している以下の記述にたどり着いた。

ハリーム（既婚の女たち）の夜会では、どっきりするような猥談をきゃっきゃっと、とりかわしたりもする。手ぶり身ぶりもはいることがあって、ひどく生々しい。わたしが恥ずかしがると、おもしろがって、「あんたはビント（未婚女性）みたい」と、よけいに話をエスカレートさせてわたしをからかう。（中略）わたしのきょうだい分のようなヌールやマリウムなどは、「かまわないよ」といつてくれるが、いろいろな女性がたくさん集まってくる夜会の写真は、とうとう一枚も撮らなかつた。あの色彩ゆたかなファッション、うたい踊り笑いさざめく女たちの集いは、荒野の夜に、夢のような美しい絵巻物を展開しているのであるが、それをカメラやカセットレコーダーのようなちゃちな文明器具で撮りおさめるよりは、彼女たちのわたしへ

の信頼と好感のほうを大事にすべきだということは、はっきりしていた（片倉 1987: 20）。

またカラー写真を豊富に掲載する『季刊民族学』の論考には、以下のような記述がある。

彼女たちのわたしへの信頼と好感のほうを大事にすべきだということは、はっきりしていた。「あなたたちの思い出に、わたしだけがみるのだから」といって撮らしてもらった写真は、約束を守って人にはみせていない。この『季刊民族学』は、いい写真を豊富に提供するので有名であるから、ほんとうは、もっと良いものを読者におみせしたい。しかし、ここにおみせした写真でも彼女たちはいやがるかもしれないと思う。じつは、内心おどおどしているのである（片倉 1984: 15）。

この記述により、現地の人々にどのような考え方や姿勢でもって向きあい、つきあい、フィールド調査資料を収集していたのか理解される。ワーディ・ファーティマ地域のコミュニティに入りこみ、女性たちと醸成していった好感と信頼関係があつてこそ、観察し、記録し、分析することができたことは間違いない。そのため、被調査者である村人（インフォーマント）たちとの関係構築を最優先し、とりわけ女性同士のコミュニケーションの場での撮影や録音はあえて行わないという姿勢を貫いたと考えられる。

また英文単著『*Bedouin Village*』の序文において、女性の画像・映像資料を残すことは社会的なタブーとされる慣習を尊重しつつ、自身に対して完全な信頼を寄せてもらった後に撮影した写真だけが同書に掲載されている旨を明記している（Katakura 1977: xv）。

したがって、この記述から推察されることは、信頼関係を第一にしたからこそ記録・記述できたフィールド調査資料が遺されているという点である。他方、調査資料としては収集しながらも公表することや議論することを避けた内容もあるだろうし、撮影した写真であっても発表を控えたものもあつたことが予想される。このような調査者の考え方や姿勢、さらには当時のサウディ・アラビアの社会状況や慣習も念頭におきつつ、どのような興味や問題意識のもとフィールド調査資料が蓄積されていったのかについて、最大限の想像力を働かせなければならない。

2.3.4 民族誌的フィールド調査資料の整理開始

片倉もところが遺した膨大な研究資料は、フィールド調査写真、論文・著作物執筆に際してのアイデアや構成等を記したメモ帳やカード類、現地で収集した生活用具類等多岐にわたる。2014年1月から2020年3月にかけて6年以上を費やし、遺族の全面的なサポートのもと把握した。2020年3月現在での片倉もところフィールド調査資料の媒体と種類ごとの点数は、以下ようになる。文書資料として手書きの野帳が4冊、手書きのメモ手帳が11冊、図面資料として手書きの地図が11点、標本資料として生活用具が243点、音響資料としてマイクロカセットが200点、カセットテープが57点、映像資料としてビデオ

オテープが55点、8 mmフィルムが9点、画像資料として写真が61,989点、合計62,579点であった（表2）。

フィールド調査写真として、61,989シーン分の存在をおよそ6年の期間を費やし確認したが、2014年2月時点では、片倉もとこ本人が著作で利用したり口頭発表の際に利用するためにデジタル化していたファイル100シーン程度を確認していたにすぎなかった。まず気づいたのは、著作においてはモノクロで掲載されたが元のファイルはカラーのものが多いこと、同時に著作で利用されていた写真はほんの一部にとどまっていることであった。一目でこれらフィールド調査写真群の学術的価値の高さが理解された（写真5）。

並んで、手書きのメモ手帳の中に、人名の実名表記による貴重な調査資料を発見できたことは、再研究に向けての大きな動機づけとなった。片倉もとは、1960年代末時点

表2 片倉もとこフィールド調査資料の媒体・種類・点数（2020年3月現在）

媒体	種類	点数
文書資料（手書き）	野帳	4
文書資料（手書き）	メモ帳	11
図面資料（手書き）	地図	11
標本資料	生活用具*	243
音響資料	マイクロカセット	200
音響資料	カセットテープ	57
映像資料	ビデオテープ	55
映像資料	8 mmフィルム	9
画像資料	写真**	61,989
合計		62,579

（出典：縄田他 印刷中）

* 標本資料としては、他にも片倉もとこにより収集されて国立民族学博物館に登録・保管されているものが189点あるため、全部では434点となる。生活用具の種類別点数と割合については遠藤他（2021）を参照。

**写真のフォーマットごとの点数については表3を参照。

表3 片倉もとこフィールド調査写真のフォーマットごとのシーン数と登録されたデジタルファイルの点数（2020年3月現在）

片倉もとこフィールド調査写真のフォーマット	フォーマットごとのシーン数	「片倉もとこ中東コレクション」(DiPLAS)に登録されたデジタルファイルの点数
35mmネガティブ・フィルム	18,890	5,316
35mmリバーサル・フィルム	30,410	9,707
120 mmフィルム（プロローニー版）	11	4
紙焼き写真（1シーンごと）	10,508	401
コンタクトプリント（複数シーン含む）	2,170	0
合計	61,989	15,428

（出典：縄田他 印刷中）



写真5 片倉もところが残した民族誌的フィールド調査写真のファイル群
撮影：藤本悠子，2020年8月3日，東京

におけるワーディ・ファーティマ地域のブシュール村に焦点をあてて、父系、母系、婚姻関係という社会的紐帯について、また1950～1970年代の村への出入りを具体的に記載している。合わせて、用水量、家畜数、農地面積、農耕歴、食生活等を示しつつ、家計の支出入、市場の物価を一覧表にすると同時に、井戸の維持管理や農作業を担う農業労働者と土地所有者の関係についてもソシオグラムとして示している (Katakura 1977: 105-163)。社会的紐帯をソシオグラムとして分析する際には、当然のことながら、個々人の氏名については匿名表記となっており、この場合は番号で示されている。その番号と実名の対応が復元できそうなオリジナルの調査資料を発見できた。この時点では仮に実名が把握できたとしても、ワーディ・ファーティマ地域を訪問して、その方々に会うことができるとは夢にも思っていなかった。その後の2018～2019年にかけて実施することとなった3回に及ぶ現地調査では(表1)、ブシュール村において何人かの人物を実際に特定することができた。このようにして、片倉もところフィールド調査資料を一つ一つ整理していく作業を通じて、資料を再分析して、再研究するための具体的で大きな展望が開けたのである。

2.3.5 アラムコ・片倉もとこ沙漠文化協賛金の締結

2014年2月に開催された片倉もとこ記念沙漠文化財団の設立披露パーティーには、生前の片倉もとこ縁のあった方々を多方面から招き、104名の参加があった。様々な反響があり、多くの参加者から財団の活動についての励ましの言葉をいただいた。サウディ・アラビアの関係者からサウディ・アラビアとの財団のさらなる文化交流を期待する声があったが、なかでも驚きと喜びをもって受けとめたのが、招待者の中から協賛金事業への声掛けをいただいたことであった。

2014年12月、片倉もとこ記念沙漠文化財団は、サウディ・アラビアの国営石油会社サウジアラムコの日本法人アラムコ・アジア・ジャパン株式会社との間で、「アラムコ・片倉もとこ沙漠文化協賛金 (Aramco Motoko Katakura Desert Culture Fund)」に関する協定を締結した(写真6)。本協定に基づき、アラムコ・アジア・ジャパンより提供された協賛金20万ドルの運用を2015年1月～2019年12月の5年間行った。サウジアラムコとは、サウディ・アラビア王国の国営石油会社で、炭化水素資源の探鉱、生産、精製、流通、輸送、販売におけるグローバルな石油・化学企業として、また、世界最大の原油および天然ガス液(NGL)輸出企業として、世界の石油市場における供給者としてきわめて重要な役割を果たしている。アラムコ・アジア・ジャパン株式会社は、日本・台湾におけるサウジアラムコの事業に対し、マーケティング、資材調達、ロジスティクス、品質保証、IT、新規事業開発等のサポートサービスを提供しているサウジアラムコの関連会社である。

協定調印式において、アルクネイニ代表取締役社長より「貴財団の活動がサウディ・アラビアと日本双方にとって意義深いものであるということ、そして貴財団の活動が今



写真6 片倉もとこ記念沙漠文化財団とアラムコ・アジア・ジャパン株式会社との間で「アラムコ・片倉もとこ沙漠文化協賛金」に関する協定を締結

撮影：アラムコ・アジア・ジャパン，2014年12月18日，東京

後大きく発展していくことを望みそれに向けた支援をしていきたい」との激励があり、片倉邦雄評議員会議長は、サウジアラムコおよびアラムコ・アジア・ジャパンの片倉もところの業績に対する評価に深く感謝し、沙漠文化研究、沙漠文化芸術への支援・育成のために協賛金を最大限に活用していくことを表明した (Saudi Aramco 2015)。

本協賛金の締結により、潤沢な資金的裏付けをもって、片倉もところフィールド調査資料の整理、またサウディ・アラビアのワーディ・ファーティマ地域における再調査の準備が加速していったのである。

3 片倉もところによるワーディ・ファーティマ地域を対象とするフィールド調査資料の学術的特徴

片倉もところによるワーディ・ファーティマ地域を対象とするフィールド調査資料の学術的特徴として、再調査開始前の段階では、以下の5点について把握することができた。

3.1 最初の調査研究者は継続調査を実施したが、自身の調査研究資料を他の研究者が再分析することは想定していなかった点

中東地域の遊牧民やイスラーム文化の研究に従事した文化人類学者・人文地理学者、片倉もところは、サウディ・アラビアのワーディ・ファーティマ地域において1968～1970年にかけて集約的なフィールド調査をなしとげ、その後も1971～1975年、1982～1983年、1988年、そして2003年にも再訪して継続調査を実施した。しかし調査地であるワーディ・ファーティマ地域に自身の指導学生や同僚研究者を案内して学際的な共同研究を実施したことはなく、同時に、自身が収集した調査研究資料を他の研究者が再利用や再分析することはほとんど全く想定していなかったと考えられる。またワーディ・ファーティマ地域における現地調査を若手研究者に継続してほしいという積極的な気持ちはなかったと判断される。したがって、長期フィールド調査研究や持続的な民族誌的調査研究を調査資料収集者自身が志向し計画していたわけではない。

ただし、再調査・再研究を実施した調査グループのメンバーには、片倉もところの指導学生・研究補助員 (河田尚子、藤本悠子)、1968～1970年の調査時には現地に同行することもあった片倉もところの夫 (片倉邦雄) が含まれていたため、最初の調査研究者から後継者に受け継がれたという継続調査の側面が全くないわけではない (縄田・片倉他 2021)。それでも基本的には、最初の調査研究者の残した研究資料や研究成果を再分析しながら、次世代の別の調査研究者が再研究を新たに行ったタイプの一つに位置づけられる。

3.2 調査時期・調査場所・調査対象という側面において高い学術的価値をもった民族誌的なフィールド調査資料である点

沙漠の地域コミュニティー、特に伝統的共同体が化石燃料資源の採掘に経済を大きく依存し始めることにより生活全般が急激に変容していったサウディ・アラビアにおいて、女性たちと生活を共にしつつ収集したワーディ・ファーティマ地域を対象とする片倉もとこフィールド調査資料の稀少性は際立っている。調査時期（1960～1970年代）、調査場所（サウディ・アラビアのオアシス社会）、そして調査対象（遊牧民集落における女性の生活）といった全ての側面において高い学術的価値が認められる民族誌的なフィールド調査資料であり、当時の人々の生活状況を記録した貴重な文化遺産といえる。調査対象国の関係者による片倉もとこの業績に対する評価は高く、それ故「アラムコ・片倉もとこ沙漠文化協賛金」という形で、資金調達につながっていった。

一方、日本における文化人類学研究また一般社会への影響という観点からは、『アラビア・ノート』、『イスラームの日常世界』、『「移動文化」考』、『ゆとろぎ』といった著作群の内容の価値が的確に位置づけられている一方、英語とアラビア語で執筆された『*Bedouin Village*』、『*Ahal al-Wādī*』における民族誌的・地誌的なフィールド調査内容の細部については、必ずしも明確な学術的評価がなされないままに現在に至っていると判断される。その点では調査対象国の関係者による評価の方が高いとさえ言える（縄田・片倉他 2021）。

3.3 次世代の調査研究者にとってフィールド調査資料の「時空間的な同定作業」に困難を伴う点

先人が収集した質的（定性的）データに対して、次世代の調査研究者が再分析による二次的利用を行うに際して、一群のフィールド調査資料の基礎的情報をどう整備するかが大きな課題となる。とりわけ本調査資料の場合、いつ、どこで集められたのかという「時空間的な同定作業」の難しさを伴っていた（縄田他 印刷中；縄田・西尾他 2021）。その理由は、調査資料収集者自身が他者の利用を想定していなかったという点だけに帰されるわけではなく、一言で形容するとすれば、サウディ・アラビアのイスラム女性に関する情報であった点にあると考えられる。例えば、地域名や民族集団名を記述する際、人文地理学的な報告においては基本的に実名を使用し、文化人類学的に社会関係に重点をおいた記述においては匿名とすることで調査対象社会に最大限配慮していたことが推測されるが、その配慮は学術的な観点からだけでなく、当時のサウディ・アラビアの社会状況や慣習を考慮に入れる必要がある。

Cliggett (2016: 233) によれば、時間をかけてコミュニティーをフォローするという縦断的なプロジェクトの基本は、ある調査から次の調査へ、また一つの時間の区切りから過去と未来の両方の区切りへとデータをリンクさせる能力にあるという。それができない限り、縦断的なプロジェクトは単に同じコミュニティーで同じフィールド・サイトで

調査研究プロジェクトを単に時間を経て行ったにすぎなくなってしまうからである。それぞれのプロジェクトが特色を持つには、時間的なつながりを欠くすべての箇所をどう埋めているかについて、深い思索が求められるのである。その点で、片倉もところフィールド調査資料は、全般的には時空間的な同定に困難を伴う資料が多い反面、集約的な調査を行ったブシュール村の社会調査データに関しては、氏名、性別、年齢、収入、親族関係、雇用関係について、実名で記録されたデータを確認できたため、その資料を糸口として、時間的なつながりを具体的に追っていく目途がついたことは特筆に値する。

3.4 社会的紐帯を表したソシオグラムを実名で表記した元資料が確認された点

再分析、二次的利用を念頭に資料整理を進めていく中で、片倉もところフィールド調査資料の学術的価値が最も具体的な形で浮かび上がってきたのが、社会的紐帯を表したソシオグラム分析の際に用いた実名表記による未公表の一次調査資料の存在である。かつその後の現地調査によって、ワーディ・ファーティマ地域において何人かの人物が特定できたことによって、具体的な調査資料に基づく研究の発展について大きな展望を持つことができた。

これからの研究の方向性として参考にしたいのは、トルコの遊牧民 Aydınlı の社会ネットワーク分析である (Kemper and Royce 2002a; Johansen and White 2002)。最初の調査研究者 U. C. Johansen は、1957～1958年の調査を皮切りに、1964、1970、1982、1989、1995年と継続調査を実施し遊牧社会の系譜データを体系的に収集していた。1997年に社会ネットワーク分析が専門の R. White が共同研究の提案をして、U. C. Johansen が長期収集してきたデータを継承することの同意をえて、洗練した社会ネットワーク分析へと高めた。その一方、U. C. Johansen は R. White の協力をへて、日付と時間等の注釈をつけたデジタルデータによる写真コレクションの整理とウェブサイトの構築を開始した。そこでは、存命の人物を除く世代の系譜図と対応できるようにすることにより、歴史的なデータ群となることを目指したと言う。2014年に「Ulla Johansen Anatolian Ethnology Collection」としてトルコの Koç 大学に資料が寄贈され、2015年からウェブサイトで公開されている (Koç University Suna Kıraç Library 2015)。片倉もところフィールド調査資料の研究、公開の方向性として、この先例は目指すべきモデルの一つとなるであろう。

3.5 フィールド調査写真の学術的価値が突出している点

抜きだした学術的価値の高さを見出すことができたのは、フィールド調査写真群であった。片倉もところは、被調査者である村人（インフォーマント）たちとの関係構築を最優先し、とりわけ女性同士のコミュニケーションの場での撮影や録音はあえて行わない

という姿勢を貫いたことがわかった。ワーディ・ファーティマのコミュニティーに入りこみ、女性たちと醸成していった好感と信頼関係があつてこそ、観察し、記録し、分析することができた貴重な調査資料である。データ収集しながらも公表することや議論することを避けた内容や、撮影した写真であっても発表を控えた場合について最大限考慮する必要がある。

ワーディ・ファーティマ地域を対象とする片倉もとこフィールド調査写真を扱う際に、まず明確に意識しなければいけないことは、いつ、どこで、何を、誰を対象として撮影したのか、という基礎情報の重要度であった。再分析による二次的利用を行うことを計画していた私たち調査グループが、その点について認識することができたのは、片倉もとこ記念沙漠文化財団の設立披露パーティー終了後に、サウディ・アラビアの複数の関係者から指摘された写真の取り扱いに関する注意事項にあつた（縄田・片倉他 2021）。

したがって、ワーディ・ファーティマ地域を対象とする片倉もとこフィールド調査写真の学術的価値がいかに高くあろうとも、調査コミュニティーとの信頼関係なしには、写真の整理を続けて公表に繋げることはできないと判断された。このような認識を大前提としつつ、調査コミュニティーと新たな関係を構築することにより、フィールド調査資料が社会的価値も有していることを認識したことが、写真資料整理そしてデジタルファイルのアーカイブ登録、すなわち「地域研究画像デジタルライブラリ」（略称 DiPLAS）への登録へとつながっていったのである（縄田・西尾他 2021）。

参考文献

〈日本語〉

アル・アフマディ、アブドゥッラヒーム

- 2014 「片倉もとこ沙漠文化」片倉邦雄訳『片倉もとこ記念沙漠文化財団ニューズレター』1: 7（アル・リヤド新聞 2014年2月27日（<http://www.alriyadh.com/91357>））。

安東美佐子

- 1989 「砂漠の民に魅かれ」『毎日新聞』p.1, 1月25日夕刊。

片倉邦雄／アナス・ムハンマド・メレー

- 2019 「サウジアラビア——国家の成り立ちと社会変化」縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私」』pp.18-19, 東京：河出書房新社。

片倉もとこ

- 1974 「遊牧民集落の成立とその態容——サウディ・アラビア、ウサイダの事例」『東洋文化』54: 130-164。
- 1979 『アラビア・ノート——アラブの原像を求めて』東京：NHK 出版。
- 1982 「沙漠に生きるベドウィンのテント」梅棹忠夫監修『住む・憩う——民具と家具、そして人の営み』（世界旅行——民族の暮らし3）pp.110-119, 東京：日本交通公社出版社

務局。

- 1984 「荒野に生きる女たち」『季刊民族学』28: 6-23。
- 1985 「アラビアにおける族的結合の性格」川床睦夫編『中近東・イスラーム社会における族的結合——シンポジウム』（中近東文化センター研究会報告6）pp.79-88, 東京：中近東文化センター。
- 1987 『沙漠へ、のびやかに』東京：筑摩書房。
- 1988 「海のベドウィン」森本哲郎・片倉もところ・日本放送協会取材班『ハッピーアラビア——帆走、シンドバッドの船』（NHK 海のシルクロード2）pp.233-276, 東京：日本放送出版協会。
- 1991 『イスラームの日常世界』（岩波新書 154）東京：岩波書店。
- 1998 『「移動文化」考——イスラームの世界をたずねて』（同時代ライブラリー 350）東京：岩波書店。
- 2008 『ゆとろぎ——イスラームの豊かな時間』東京：岩波書店。
- 2009 『やすむ元気もたない勇氣——「ゆとろぎ」の思想に学ぶ生きる知恵』東京：祥伝社。
- 2013 『旅立ちの記』東京：中央公論新社。
- 片倉もところ記念沙漠文化財団事務局
- 2013 「財団について」<http://moko-f.com/introduction/>（2020年8月7日閲覧）
- 河田尚子・藤本悠子
- 2019 「文化人類学者・人文地理学者、片倉もところ 縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私』』pp.24-25, 東京：河出書房新社。
- 河田尚子・藤本悠子・縄田浩志
- 2019 「片倉もところの著作と考察」縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私』』pp.28-29, 東京：河出書房新社。
- 郡司みさお
- 2014 「片倉もところ沙漠文化財団設立披露パーティー開催報告」『片倉もところ記念沙漠文化財団ニューズレター』1: 4-5。
- コウル, D. P.
- 1982 『遊牧の民ベドウィン』（現代教養文庫 1062）片倉もところ訳, 東京：社会思想社（Cole, D. P. 1974 *Nomads of the Nomads: The Āl-Murrah Bedouin of the Empty Quarter*. Chicago: Aldine Publishing Company）。
- 後藤明
- 1992 「片倉もところ著『イスラームの日常世界』」『民博通信』55: 36-40。
- 清水芳見
- 2004 「片倉もところ『アラビア・ノート』——アラブの原像を求めて」小松和彦・田中雅一・谷泰・原毅彦・渡辺公三編『文化人類学文献事典』p.382, 東京：弘文堂。
- 東京国立博物館・サウジアラビア国家遺産観光庁・日本放送協会・朝日新聞社編
- 2018 『アラビアの道——サウジアラビア王国の至宝』東京：東京国立博物館・サウジアラビア国家遺産観光庁・日本放送協会・朝日新聞社。
- 縄田浩志
- 2019 「片倉もところが調べた人びと——定着遊牧民」縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私』』pp.30-31, 東京：河出書

房新社。

縄田浩志・片倉邦雄・吹田靖子・郡司みさお・河田尚子・藤本悠子

2015 「2015年アラムコ・片倉沙漠文化協賛金 サウジアラビア事前現地調査報告」『片倉もところ記念沙漠文化財団ニューズレター』2: 3-18。

縄田浩志・片倉邦雄・藤本悠子・河田尚子・郡司みさお・古澤文・渡邊三津子・遠藤仁・石山俊

2021 「片倉もところによるサウディ・アラビア，ワーディ・ファーティマ地域を対象とするフィールド調査資料，特に写真資料の社会的特徴について」『片倉もところフィールド調査資料の研究』西尾哲夫・縄田浩志編（国立民族学博物館調査報告153）pp. 31-61，大阪：国立民族学博物館。

縄田浩志・西尾哲夫・片倉邦雄・藤本悠子・河田尚子・古澤文・渡邊三津子・遠藤仁・石山俊

2021 「片倉もところによるサウディ・アラビア，ワーディ・ファーティマ地域を対象とするフィールド調査写真のアーカイブ登録について」『片倉もところフィールド調査資料の研究』西尾哲夫・縄田浩志編（国立民族学博物館調査報告153）pp. 63-86，大阪：国立民族学博物館。

縄田浩志・藤本悠子・河田尚子・古澤文・渡邊三津子・遠藤仁・片倉邦雄

印刷中 「片倉もところフィールド調査資料の資料的特質と整理プロセス：民族誌的な質的データの二次利用のための方法的かつ実践的な課題抽出として」『沙漠研究』。

縄田浩志・渡邊三津子／アナス・ムハンマド・メレー

2019 「オアシス，ワーディ・ファーティマの歴史」縄田浩志編『サウジアラビア，オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私」』pp. 20-21，東京：河出書房新社。

藤本悠子

2019 「『ラーハ』とは」縄田浩志編『サウジアラビア，オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私」』p. 48，東京：河出書房新社。

藤本悠子・河田尚子・郡司みさお・Anas Mohammed Melih・渡邊三津子・遠藤仁・縄田浩志

印刷中 「片倉もところフィールド調査写真を用いた半世紀前の被写体女性同定プロセス：サウディ・アラビア，ワーディ・ファーティマ地域における生活変化の考察に向けて」『沙漠研究』。

牧野信也

1979 『アラブ的思考様式』東京：講談社。

宮治美江子

1977 「書評 片倉もところ著『Bedouin Village—A Study of a Saudi Arabia People in Transition』」『現代中東研究』1(2): 84-88。

渡邊三津子・縄田浩志

2019 「アラビア半島——自然環境」縄田浩志編『サウジアラビア，オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私」』pp. 16-17，東京：河出書房新社。

〈外国語〉

Al-Bakrī, Abū 'Ubayd 'Abdallāh ibn 'Abd al-'Azīz ibn Mu'ammad

1983 *Mu'jam mā Ista'jama min Asmā al-Bilād wa-al-Mawāḍi'*. Bayrūt: 'Alam al-Kutub. (in Arabic)

- Altorki, S. and D. P. Cole
1989 *Arabian Oasis City: The Transformation of 'Unayzah'*. Austin: University of Texas Press.
- Chatty, D.
1996 *Mobile Pastoralists: Development Planning and Social Change in Oman*. New York: Columbia University Press.
- Cliggett, L.
2016 Preservation, Sharing, and Technological Challenges of Longitudinal Research in the Digital Age. In R. Sanjek and S. W. Tratner (eds.) *eFieldnotes: The Making of Anthropology in the Digital World*, pp.231-250. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.
- Corti, L. and P. Thompson
2004 Secondary Analysis of Archive data. In C. Seale, G. Gobo, F. Gubrium, and D. Silverman (eds.) *Qualitative Research Practice*, pp.1-21. London: Sage Publications.
- Dickson, H. R. P.
1949 *The Arab of the Desert: A Glimpse into Badawin Life in Kuwait and Sau'di Arabia*. London: George Allen and Unwin.
- Eid, C., M. Fallatah, and M. Yamada
2020 *The Return of Women: A Post-Rentier Rediscovery of the Arabian Heritage of Female Workforce Participation*, King Faisal Center for Research and Islamic Studies. <http://kfcris.com/en/view/post/291> (accessed August 7, 2020)
- Foster, G. M., T. Scudder, E. Colson, and R. V. Kemper (eds.)
1979 *Long-Term Field Research in Social Anthropology*. New York: Academic Press.
- James, G.
1978 The People of the Desert. *Financial Times*. 17th April: 31.
- Johansen, U. C. and D. R. White
2002 Collaborative Long-term Ethnography and Longitudinal Social Analysis of a Nomadic Clan in Southeastern Turkey. In R. V. Kemper and A. P. Royce (eds.) *Chronicling Cultures: Long-Term Field Research in Anthropology*, pp.81-99. Walnut Creek, CA: A Division of Rowman & Littlefield Publishers.
- Katakura, M.
1977 *Bedouin Village, A Study of a Saudi Arabian People in Transition*. Tokyo: University of Tokyo Press.
1996 *Ahal al-Wādī, Dār al-Qārī al-'Arabī*. (in Arabic)
- Kemper, R. V. and A. P. Royce
2002a Long-Term Field Research: Metaphors, Paradigms, and Themes. In R. V. Kemper and A. P. Royce (eds.) *Chronicling Cultures: Long-Term Field Research in Anthropology*, pp. xiii-xxxviii. Walnut Creek, CA: A Division of Rowman & Littlefield Publishers.
2002b Restudies and Revisits: Styles of Collaborative Research. In R. V. Kemper and A. P. Royce (eds.) *Chronicling Cultures: Long-Term Field Research in Anthropology*, pp. 1-7. Walnut Creek, CA: A Division of Rowman & Littlefield Publishers.
- Kemper, R. V. and A. P. Royce (eds.)
2002 *Chronicling Cultures: Long-Term Field Research in Anthropology*. Walnut Creek, CA: A

Division of Rowman & Littlefield Publishers.

Koç University Suna Kiraç Library

2015 Ulla Johansen Anatolian Ethnology Collection, <https://librarydigitalcollections.ku.edu.tr/en/collection/ulla-johansen-anatolian-ethnology-collection/> (accessed August 7, 2020)

Neale, B.

2019 *What is Qualitative Longitudinal Research?* London: Bloomsbury Academic.

Saudi Aramco

2015 *Arabian Sun*, February 11.

Sbriccoli, T.

2016 Between the Archive and the Village: The Lives of Photographs in Time and Space. *Visual Studies* 31(4): 295-309.

Seale, C., G. Gobo, J. F. Gubrium, and D. Silverman (eds.)

2004 *Qualitative Research Practice*. London: SAGE Publications.

Stacey International and al-Trurath

2006 *The Kingdom of Saudi Arabia*. London: Stacey International and al-Trurath.